

編集後記 From Editor



公園の遊具脇にある水飲み台
(大阪市扇町公園)

本号論考で、小泉和子さんは、水に困った昔のことを思い出しながら、「ポンプ井戸だったが、ごっきんごっきんと漕ぐと、ざーざーときれいな水が溢れ出す。涙が出るほど嬉しかった」と述懐されている。水が豊かであると言われている日本でも、各家庭の、それも台所や風呂、手洗いにまで水道が繋がったのは、そんなに遠い昔のことではない。

私が子どものころは、既に水道の恩恵を受けていたが、まだ近所に井戸もあった。手押しポンプから出る水も、はじめてキラキラ輝いていたのを覚えている。地下から湧く水は、夏は冷たく、冬はほんのり温かだった。かつては、野外で水に触れることも多かったように思う。小学校の校庭の横には水飲み場があり、短い休み時間に目一杯遊んで、教室に戻る前に蛇口に口をつけて水道の水をそのまま飲んだ。

以前、東南アジアのある国を訪れたとき、ホテルの水でも決してそのまま飲まないようにと注意された。その水が不衛生だということではなく、水が合わない場合があるからだ。そんなときに、日本での普段の暮らしの中で、飲めるくらいきれいな水を得ることに使っていることに気づく。一方で、世界には良質の水を得ることが困難な人たちが何億人もいるという。その人たちにとって、蛇口をひねると水が出る、それはまるで夢のようなことだろう。

私たち日本人は、幸いなことに、あまり水がないことを体験しない生活してきている。水は普通にそこにある。川の水も地下の水も、使っても使わなくてもただ流れていくように思える。だったら、節水などせずにあるものはどんどん使えばいい？ところが、蛇口から出る水にはコストがかかっている。CELの濱研究主幹が論じているように、実は水はエネルギーの塊でもある。その意味で、できるだけ無駄には水を使わないことが省エネにつながる。さらに、水を使うということは、水に汚れを持っていつてもらうこともある。汚した水を自然のサイクルに戻すためにも多くのエネルギーが必要になる。だから、なによりも水を汚さないことが重要だろう。

「水から見たエコライフ」を考えると、まず、ごく普通の感覚として水を大切に思うことから始めたい。大切な水は、けっして無駄には使えないはずだ。

— 京 雅也

表紙写真 阪神・淡路大震災で倒壊した邸宅跡地につくられた公園に、かつてあった庭や池水などを生かしてビオトープやポンプ井戸などが整備されている(兵庫県芦屋市)
裏表紙写真 三重県名張市の築瀬水路に設けられた「はないかだ」(写真提供:川の会・名張)／湧き水の川端(かばた)で野菜を洗う(滋賀県高島市)／
緑に囲まれて建つ雨水活用システムを取り入れた住宅(埼玉県朝霞市)

CEL 87号 特集 ■ 水から見たエコライフ

発行 ● 平成21年1月8日 頒価 1,000円 (送料別途)

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 (CEL)
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2

■発行人 多木秀雄 Hideo Taki

■編集人 京 雅也 Masaya Kyo / 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集 ● 関西ビジネスインフォメーション(株) 内 CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18

住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307

印刷・製本 ● 日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2009 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。

本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ [http://www.osakagas.co.jp/cel/] でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで